朝日新聞　第3種郵便物認可

幅5センチ「スラックライン」ジャンプ・宙返りの妙技

トップ選手 栃木県から続々

綱渡りのようなスポーツ「スラックライン」をご存じだろうか。細い帯のような「ライン」の上を歩いたり、ジャンプしたり、宙返りしたり。華麗な動きで近年、人気が高まっている。国内外で活躍するトップアスリートを次々と生み出しているのが、栃木県だ。

お前はまだギタカントゥを知らない　題字/井田ヒロト

宇都宮市の市体育館で1月15日に開かれたスラックライン体験イベント「チャレンジスラックライン」。児童ら約180人が参加し、付き添いの保護者も含めて会場はにぎわっていた。

デモンストレーションのために集まったのは、いずれも栃木県出身で国内トップクラスの選手5人。DJが流すダンス音楽にあわせ、上げた足をつかんで静止したり、ひねりを加えた宙返りをしたりするなど器械体操のような動きを披露した。参加者らが幅約5センチの帯状の「ライン」の上を歩く際は講師も務めた。

選手の1人、須藤美青さん(23)は宇都宮市出身で、現在は神戸市を拠点に活動する。かつて女子の世界ランキング、国内ランキングともに1位になり、海外の大会でも優勝した県勢の先駆者だ。

この日のパフォーマンスでは、マットレスの上約150センチに張られたラインの上をトランポリンのように跳ねながら宙返りをするなど、アクロバティックな動きを披露した。

スラックラインは体幹トレーニングにも使われ、スキージャンプの選手が練習メニューに採り入れたことでも知られる。「乗れば乗るほどうまくなる。男女も大人も子どもも、みな楽しめるのがスラックラインの魅力」と須藤さんは言う。

小学生の時にスラックラインに出会った須藤さんは、母親で宇都宮市在住のスラックラインのインストラクター、直美さん(53)と練習を続けてきた。最初に興味を持ったのは直美さんの方で、周りに指導者がいないなか、雑誌で紹介された内容を見ながら独学で練習した。トップ選手らの練習を直接見る機会があり、華麗なジャンプに魅せられたという。

直美さんはいま、市内2カ所のスラックライン教室で指導している。教室には、女子の世界ランキング、日本ランキングともに1位の岡沢恋さん(14)と、ともに2位の竹部茉桜さん(17)も、かつて通っていた。

「床の上では当たり前のことが、ラインの上では難しい。その難しさを乗り越えた達成感がスラックラインの魅力」。直美さんはそう話している。

先駆者の活躍 後輩の刺激に

スラックラインの男子の世界、国内ランキングの1位は宇都宮市の中学2年生、中村陸人君(14)だ。さくら市内の祖父母の家につくられた屋内外の練習場で、平日は3時間、休日は丸1日練習を続けている。

中村君は小学生の時から海外の大会にも出場。昨年6月、ドイツ・シュツットガルトで開かれたワールドカップで優勝した。弟で小学校6年生の拓志君(11)もジュニア男子の国内ランキング1位だ。

スラックラインを最初に始めたのは、インストラクターの資格を持つ父・学さん(43)だった。サッカーにスキー、自転車とスポーツに親しみ、「体幹は強いと思っていたのにスラックラインは全然できなくて、それがおもしろかった」と学さん。熱中する父の姿を見て、中村君も遊びながらスラックラインになじんでいったという。

始めたころは、ジャンプしてラインの上に立つのに半年ほどかかったというが、「できなかった技ができるようになった時、うれしくてどんどん続けて熱中していった」と中村君。後方に宙返りしながら1回転半のひねりを入れる「リクトフリップ」が得意技だ。

ジャンプを繰り返していると、景色が広がっていくように見えるという。「これからも見ている人が驚くようなパフォーマンスをしていきたい」

栃木県にトップクラスの選手が多いのはなぜか。日本スラックライン連盟の小倉一男理事長によると、スラックラインが日本に入ってきたのは2009年。「須藤美青さんら栃木県の先駆者たちは、その直後からいち早く始めていた。そうした先駆者たちの活躍が、他の選手の刺激になったのではないか」とみる。

自分が自由に使える練習場を持つ選手が目立つのも特徴という。小倉理事長は「栃木県の選手らは、もともと一緒に練習していた。切磋琢磨するなかで、強くなっていったのだと思う」と話している。（石原剛文）

上須藤美青さん（左）らプロの指導のもと、イベント会場はスラックラインを体験する子どもたちでにぎわった＝宇都宮市　下後方に宙返りする「バックフリップ」を披露する中村陸人君＝さくら市